

# 1. 長崎時代の梅屋庄吉

長崎史談会幹事 村崎春樹

梅屋庄吉は、明治元年(1868)11月26日父本田松五郎と母ノイの間長崎市に生まれる。生後まもなく(詳細な時期は不明)、長崎市西浜町川端通り31番で精米業と貿易商を営む梅屋吉五郎と妻ノブの養子となる。実父松五郎と養父吉五郎とは縁戚関係にあったとされている。梅屋商店は、現在の鉄橋の近く西浜町電停から北へ数十メートルの所である。当時の西浜町川端通りは、川岸から路面電車の軌道まで約7メートルに町屋が建っていた。明治中期に作成された「西浜町地図」によると梅屋商店の敷地は間口18メートル、奥行7.4メートルで130平方メートルとされている。この西浜町川端通りには16番(地)に洋鉄商松江梅吉商店、18番(地)には黒積商店、20番(地)木村紙店が記載されている。この地図には梅屋商店のあった川端31番(地)と30番(地)には梅屋洋服店が記載されているが、これは明治36年梅屋庄吉の養母ノブの死去に伴い、梅屋商店を番頭夫婦にまかせたが、その後番頭が亡くなり残された番頭の奥さんが洋服店を開業した。その際に元の主人の屋号を用いて梅屋洋服店としたものである。梅屋庄吉は、大正15年(1926)1月東京で行われた「M・パーティー倶楽部」の発会記念パーティーにて配布された自伝『わが影』に幼少時の記憶として「奇しき記憶の分尙在せるあり。われ4,5歳の頃、明治財界の巨人故岩崎弥太郎翁に愛せられ、常に翁の背に負はれて嬉戯せし事也。其頃翁は故後藤象次郎伯の経営せらし土佐商会(高島炭鉱事務所)の支配人にて、我家の借家に在りて(我が家と相對せる)われは実に家主どんの息たりしが故なり」と記しているが、岩崎弥太郎は明治2年(1869)には、長崎から大坂へ移っており、また明治2年当時には庄吉は、わずか2歳(今の年齢計算では1歳)の乳児であることから、その当時の記憶が実際にあったとは考えられない。明治5年(1872)梅屋庄吉は、出来鍛冶屋町(現鍛冶屋町)8番(地)にあった私塾佐藤塾で習字を習う、庄吉5歳の時である。車田譲治氏は、著書『国父孫文と梅屋庄吉』並びに庄吉のひ孫小坂文乃氏も著書『革命をプロジェクトした日本人』の中で、この年庄吉は、自宅裏の中島川に落ち仮死状態になり葬儀中に蘇生し、猫魂がとりついたと大騒ぎしたと記述しているが、長崎には本来この様な意味での言い方はなく、平素ふまじめでいいかげんな生活をしている人が、ある時、急に真面目で几帳面な生活をする事があると、揶揄する意味で「猫の魂が乗り移った」と云う事があるが、車田譲治氏や小坂文乃氏が記述している様な用い方はしない。これらの記述は長崎での検証不足による誤用である。しかし、この事象は現在開催されている「孫文・梅屋庄吉と長崎展」に同著の記述通り展示されている。明治8年(1875)1月10日、自宅近くの榎津町6番地(現万屋町)入学したとされているが、同校は長崎県教育会編『長崎教育史』によれば同年2月には、榎津小学校は存在せず、明治7年(1874)に東古川町にあった第2番啓蒙小学校から改称した舊川(フルカワ)小学校が同年2月以降に榎津町に移り、榎

津小学校に改称する。

庄吉が1月に入学したとすれば、舊川小学校であり、後に榎津川学校となった。庄吉が明治11年(1878)同校に在籍していた事は、同年の「学務課報告掛事簿」に榎津小学校に通う児童304人が同校へ旗竿台並びにその築造費用と旗二流を寄付した記録が残っており、その中に梅屋庄吉の名前がある事で証明できる。

この記録は、現在長崎において、梅屋庄吉の名前が確認出来る、ただ一つのものである。明治11年(1878)3月5日榎津小学校を卒業する。小学校を卒業した後、同年4月梅屋商店の金300円を持ち出し家出する、庄吉11歳の時である。この当時の一等教員で月給10円の時代である。行先は大阪であったが、京都などにも足を向けていた。1ヶ月の放浪を経て同年5月中旬に金を使い果たし長崎に戻る。その時の写真が現在も残っている。さらに翌明治12年(1879)3月5日四国へ向けて家出する。伊予三津浜から八幡浜、金山出石寺を巡って、7月に帰る。明治15年(1882)5月上海へ密航するが、上海で持ち金を盗まれ上海などを放浪の末、明治16年(1883)の初めに長崎へ帰る。明治20年(1887)庄吉は、朝鮮半島での大飢饉による米穀類価格高騰に便乗して、持船高千穂丸に米を積み朝鮮半島各地で金と米の物々交換で莫大な利益を得る。その後も米を朝鮮半島に送り続けたが翌年は大豊作、米価は大暴落となり大損、今までの利益で穴埋する。さらに庄吉は、鉾山開発を目論見、九州各地8ヶ所の鉾山を試掘するが事業化に至っていない。明治25年(1892)暮、米の思惑買いにて大損、莫大な借財を残して長崎から逃亡する。この借財の大半は、養父である吉五郎が保有していた不動産を処分して返済する。明治27年(1894)6月、庄吉は長崎から逃亡以来2年ぶりに密かに帰る。梅屋商店には、新たに養女となったトクがいた。養父吉五郎は重い病の床にあったが、養父はトクと庄吉の祝言を望み、それを見届けたのち6月16日永眠する。葬式の翌日庄吉はシンガポールへ旅立。庄吉27歳、トク20歳。明治36年(1903)3月23日養母ノブが他界、同年夏妻トクは、長崎の梅屋商店を番頭夫婦にまかせ、当時庄吉のいた香港へ移った。シンガポールにて映画興業を行い大成功した庄吉は、日本へ本拠を移すべく帰国、明治38年(1905)6月長崎へ上陸する。11年ぶりの帰郷であった。庄吉は、実家近くの榎津町にあった西川屋旅館に宿を取った。6月25日榎津町の劇場栄之喜座にて映画の試写会を行った。庄吉は、同年7月上京する。以後、庄吉は長崎を訪れることは無った。(続く)

